

ころをひとつに 牧師 島田勝彦

2011年教会標語「イエスさまの肢体になろう」

…どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。(マタイ 18:19)

日本宣教 150 年の間に、福音の前進が見えてこない。その解決は、教派教団を超えて、ただキリストにあってみな一つになることです。それぞれがキリストを愛する愛の表現が違って、キリストを愛し、救い主として信じ仰ることに於いてわたしたちは一つであることを世に示すことです。

教会が一つになるだけではありません。クリスチャンも一つにならなければ、世にその存在を証しすることができません。

いずれも、内向きの一つではありません。これまでの教会は一国一城の嫌いがあって、勢い排他的でした。特に都市部の教会は、ほかの教会との交わりを築こうとしないまま、おのが教会の成長に終始した嫌いがありません。

クリスチャンもそうです。クリスチャン同士の交わりよりも、自分の信仰の確立で精一杯になっていないでしょうか。自分は教会にではなく神さまに、イエスさまに繋がっているから大丈夫だ、と。煩わしい人間関係よりも、神さまにだけ繋がりを続けよう、と。しかも信仰は個人の内面の問題だから、周囲には当たらずさわらず、波風を立てず、物わがりのいい人であり続けよう、と。

しかし、キリストの民は遣わされる器です。イエス・キリストの救いにあずかった者は、イエスさまの弟子として、否キリストの肢体、からだの一部として、押し出された役割を負う者なのです。バプテスマの折り、受洗者が派遣の祈りを受けるのはそのためです。毎聖日の礼拝毎に「祝祷」が捧げられるのは、みことばを聴き、養われた礼拝者が新しい一週間の生活に遣わされるからなのです。

伝道する教会になりましょう。伝道するクリスチャンになりましょう。

伝道は福音、イエス・キリストにもたらされた福音を伝えることです。「福音」とは喜びの訪れ、全ての民に与えられる大きな喜びです。

「喜び」とは、イエスさまがその命を懸けて罪に勝利された事実をわたしたちのものとすると言ったこと

です。

「喜び」とは、イエスさまの復活によってわたしたちすべてのものが、滅び行く命ではなく神の国を継ぐ永遠の命に生まれ変わることができるということなのです。

伝道はこの喜びの種まきです。実るのはこれであるか、あれであるか、蒔く者には解りません。だからといって手をこまねいていけば何も芽生えることはないのです。育てられるのは神です。

語ることが苦手なら、福音に生きている生活をもって示そうではありませんか。喜びと感謝と祈りの生活をもってキリストの福音を知っていただくではありませんか。

日本プロテスタント発祥の地と目される横浜市内住民、約 370 万人の人々が、一人もキリストの福音を聞くことも、触れることもなかった、ということがないようにしましょう。なぜならば、たとえ 1% 足らずであっても、キリストの福音を受け止めたわたしたちがここに住み、生活しているのですから。

「牧師は教会の牧師」「信徒は社会の牧師」。1% クリスチャンといわれるならば、一人が 99 人を相手にすればいいのです。一年 365 日、毎日一人の人に、わたしが信じている福音を、2009 年以降の目標である 5 年間続けたなら、清水ヶ丘教会に繋がるクリスチャンによって約 37 万人の人にこれを知らせることができそうです。

聖書の世界の種まきの多くは空に向かって種を放り投げました。小さな種を風に乗せたのです。程良く地に種が蒔かれるためでした。ですから、その結果はイエスさまの譬のように、ある種は道ばたに、ある種は石地に、ある種は茨の生い茂るところに、そして良い地に落ちる、ということになるのです。

至極無責任なような気がしますが。それでも蒔くのです。朝の内種を蒔き、夕暮れまで手を休めてはならないのです。育てたもう神によって、時が来れば必ず成長し実を結ぶからです。それも何十倍、何百倍にも実が結ぶからです。「時が良くても悪くても、みことばを宣べ伝え続けなさい」(Ⅱテモテ 4)、との教えがあるとおりです。

このイエス・キリストの招きに応えましょう。孤独にならず、独りよがりにならず、一国一城の高見の見物に留まらず、キリストにあつて心を一つにして過ごそうではありませんか。何よりもイエス・キリストの福音宣教の前進を願って、「心を一つにして求め」ましょう。「わたしたちの天の父はそれをかなえてくださる」からです。